

第12回特別展

亀井高孝 光太夫をみつけた歴史学者

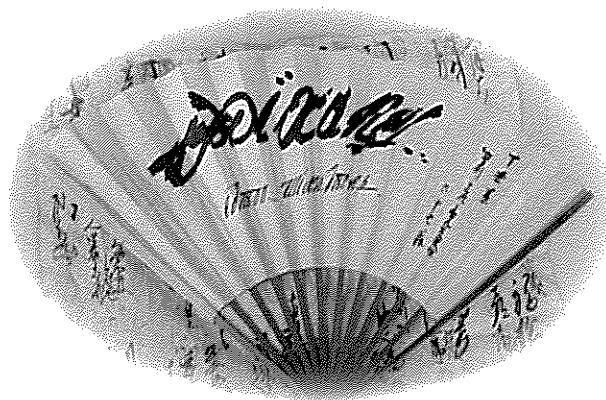
会期：平成30年10月18日（木）～12月24日（月・祝）

亀井高孝は、大黒屋光太夫に深い関心を寄せ、その研究に先鞭をつけました。光太夫を扱った主著には『北槎聞略』(三秀舎 1937) や『大黒屋光太夫』(人物叢書 119 吉川弘文館 1964)、『光太夫の恋恋』(吉川弘文館 1967) などがあります。なかでも、それまでほとんど世に知られていなかった「北槎聞略」に価値を見出し、校訂・出版し、広く紹介したことは、亀井高孝の大きな功績といえるでしょう。現在の私たちが「北槎聞略」を書店や図書館で容易に手にとることができるのは、亀井高孝のこれらの業績によるところが大きいのです。

今回の特別展では、昨年寄贈を受けた亀井高孝旧蔵資料を中心に展示し、亀井高孝の業績を紹介します。是非御覧ください。

亀井高孝の御三男・亀井泓<sup>あかし</sup>様および御令孫の小野あき子様より本紙のために御寄稿いただきました。御曾孫の太田光子様には特別展開催に当たり多大な御協力をいただきました。記してお礼申し上げます。

寄贈資料のご紹介



大黒屋光太夫書「李白」

扇面紙本墨書き 文化14年（1817）  
「リハク イット シヒヤッペン」

平成30年5月に市内個人より寄贈された光太夫直筆の扇子です。

光太夫67歳のときの作品です。李白は中国の詩人。一斗酒を飲む間に百篇の詩を作ったと言われています。

光太夫は、長寿を寿ぐ言葉や縁起の良い言葉などを好んで贈っており、この作品は内容から酒席などで頼まれて揮毫したものかもしれません。

大黒屋光太夫記念館では、特別展・企画展を通して、さまざまな視点から光太夫について紹介しています。

大黒屋光太夫記念館

〒510-0224 三重県鈴鹿市若松中一丁目1-8  
Tel & Fax 059-385-3797

発行/鈴鹿市文化スポーツ部  
文化財課  
発行日/2018年10月18日

## 一明治人の肖像 息子から見た亀井高孝

語り手 F・亀井泓（亀井高孝の三男）

聞き手 M・太田光子（亀井高孝の曾孫）

於 東中野、亀井邸 2018年8月24日

M・おじちゃんが見た亀井高孝は、おじいちゃん（亀井高孝）

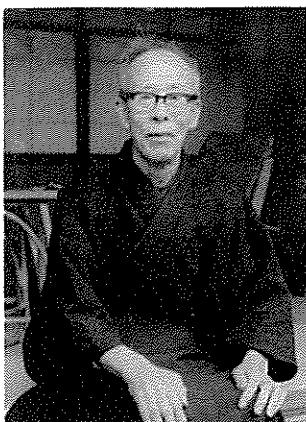
F・息子から見た亀井高孝は、洋行中の昭和二年十月二十九日にお生まれになりました。

F・親父（亀井高孝）は僕が生まれた年の三月に鹿島丸という船で、まだ飛行機がない時代ですから、船で出かけたんですね。当初は「弘」とする予定だったそうだけれど、「海にちなんで「シ」をつけたら如孝（かし）・一九一二生。国語学者）が進言して、辞書をひいたらそういう字があることが分かった。それで「泓」になつたんです。人生五十年といわれていた時代に母（千代）は三〇代の終わり、三十八歳かな。親父は四十二歳。僕は晩年の息子、余り物なんです（笑）。

M・家ではおじいちゃんのことは何で呼んでらした？

F・「お父さま」ですね。お父さんといつても、今とは違つて、昔ながらの家父長制。親父がいちばん偉い。

長男がその次に偉い。どの家もそうだったのでしょくも違つた。親父はヒラメ、その他のものはイワシンタツクス（カメラ）か、どちらか買つてあげるといつて、結局コンタツクスを買つてもらつていただけれど、どちらも当時はすごく高いものだつたんです。



父・亀井高孝 昭和43年5月

それができたのは、三田の養母（ふさ）の資金援助があつたからです。僕は小学生のとき、よく三田までお金を受け取りに行かされた（笑）。お金をポケットに入れて、落としたら大変だから、そのボケツトの口を縫うんですね。母親は嫁姑問題で辛い思いをしたようですが、家計的には助かつて頭が上がらなかつた。

M・長男の孝おじちゃんとは十五（歳）違うんですね。

F・孝は小さい時は神童と言われて、頭がいい男でしたね。慶應の幼稚舎の時に詩集を出したりして…。

親父は、男の子は性格と能力に応じてそれぞれ違う学校を選択した。個性の強い長男の孝は慶應の幼稚舎（小）から武藏高等尋常科（中）・高等科（高）、東大（東京帝國大学）文学部。控え目で勉強家の次男（裕・ゆたか・一九二一生。倫理学者）は、卒業生に優秀で社会でも活躍している人が多く、人に頼ると言つたらおかしいけれど、そういう人がいたら心強いということで、学習院初等科から親父自身も辿つたコースの一中、一高、東大文学部へ行つた。そして末っ子の僕は頭が良くないので、試験なしで

進学できる学習院初等科、中等科、高等科に通つた（笑）。

女の子は三人とも雙葉系。三女（阪田雪子。日本語教育学研究者）だけ、雙葉を出てから東京女子大学に入ったんです。

M・おじちゃんも東大ですね？ 頭が良くなくて、東大には入れないと思います。

F・いやいや。兄貴一人はね、無試験だつた。東大を受験して入つたのは、この頭の悪い泓だけなんだな

M・おじちゃんも東大ですね？ 頭が良くなくて、東大には入れないと思います。

F・いやいや。兄貴一人はね、無試験だつた。東大を受験して入つたのは、この頭の悪い泓だけなんだな

M・おじちゃんも東大ですね？ 頭が良くなくて、東大には入れないと思います。

F・実は三つぐらいの時かな、すごい中耳炎をやつたんです。その頃、ペニシリソミみたいな薬はないから、頭の骨を削るような大変な手術だつた。そのとき先

生が、「大変な手術になります。命は助かつても頭は保証しない」と言つた。そしたら親父が「とにかく、命だけは助けてやつてほしい」と言つたらしく。

そう言つておきながら、手術が成功して、治つてもう少し大きくなつたら「泓はバカだ、バカだ」というの。「バカでもいいから命だけはつて言つたはずじゃないか」と（笑）。よつほど言つてやろうかと思つた（笑）。

M・おじいちゃんが「泓はバカだ」なんておつしやつたんですか？！

F・うん、言つた（笑）。「昔のことを忘れたのかよ、お前は！」と言いたかつたけれど、とても言える雰囲気じやなかつた。

M・怖かったですか。

F・とつても怖かつた。怖かつたことたくさんあります

したけど、子供の時は怒られると押入れに閉じ込められる。そこで子供の僕は考えたの。おしつこしうやうの。お布団に。ね？ そうすると、布団が全部汚れちやう。

M：「考えましたね！」

F：「考えただろ？ ザマアみろってなもんでね（笑）。押入れに入れて出してくれないんで。こつちはおしつこしたくてしようがない。」

M：「そりやそうです。」

F：「それ以来ね、」

M：「成功しましたか？」

F：「領いて）入れられなくなつた（笑）。」

M：「それは良かったです（笑）。」

F：「そういう風にね、いつも怒られてたんだよ（笑）。」

褒められた覚えはないですね…。これは真面目な話

だけれど、一番怒られたことで覚えているのは、大

学卒業した時に卒業証書を持って、鎌倉へ行つた時

のことですね。卒業報告という軽い気持ちでカジュ

アルな服装で行つたんです。そしたら卒業証書を見

ようともせず、いきなり「その服装はなんだ！ 帰

れ！ 出直してこい！」と怒鳴つたの。お袋がとりな

してくれたけど、聞かなくて。仕方がなく、東京へ

帰つて、制服を着て、出直したの。」

M：「出直してらしたのは、お偉いですね。」

F：「だって、出直さるをえないじやない（笑）、『帰れ！』と言わされたら。」

M：「今の子だつたら、ぼきつと気持ちが折れてしまうのではないか？ もういつへん出なおすとい

うのは、鍛錬された心がないとできないと思つ。」

F：「そうかなあ。なんていうか、僕なりに「あ、しま

った」と思つたんだろうね。その時の僕としては、制服は二人の兄が各大学三年、大学院を三年、一人だと十二年も着古して（昔は通学の時は皆、制服制定だった）、継接ぎの上にまた継接ぎしたものだつたし、育英会から毎月、奨学資金を借りていた。収入を得るようになつてから返さなければいけない制度のものなんだけれど、さらに僕はアルバイトもしていたから、感謝の気持ちが薄かつたこともあつたと思う。僕が悪かつたんだ。この時、本当にすごい勢いで怒つた。親父が。そして鎌倉へ出直して行つたら、ちゃんとお赤飯炊いて待つていてくれた。ここそこは、いい話なんだ（少し涙声）。こここのところはね。」

M：「必ずもう一度来ると信じていたんでしょうね。」

F：「僕にはすぐ煩かったですね。言葉にも煩かった。」

子供だと解らない言葉がたくさんあるじゃない？

意味を尋ねても教えてくれない。たとえ食事中でも

「自分で字引を引いて調べて來い」と言われた。今

みたいにスマホやパソコンはないから、字引を引く

というのは面倒くさかつたけれど、人に聞いて済ま

せようとするなどを許さなかつた。それはいい僕だ

つたと思います。言葉のアクセントにも煩かつた。

「赤とんぼ」も、「か」にアクセントがあつたら垢

のついたトンボだ、とか言われましたね。あと、手

紙などで間違つた字を書くと、赤ペンでチェックし

て返されることがあつた。そういう僕は、のちのち

とつても勉強になりましたね。」

M：「アカセントも、ですか。」

F：「それから、筆まめな人でした。外出から帰るとその日逢つた人に手紙を書いていたし、貰つた手紙に

は直ぐ返事を書いていた。それが習慣になつてたのでしょう。左手に巻紙を持つて筆ですらすらと字を書いていた姿を覚えてます。後年は葉書に万年筆が多くなりましたけれども。」

M：「厳しい一面もやはり、あつたんですね…。」

F：「あ、そっそ、よく歴史の起きた土地、地理を考えないといけないということを話して聞かせてくれましたね。メソポタミア文明にはチグ里斯・ユーフラテス川、エジプトにはナイル川、西洋にはライアン川がある。ラインを境にプロシアとフランスが争つたという歴史がある。日本だって川中島や富士川があるように、川が歴史の舞台となる。非常に地理が面白い存在だとよく話してましたね。」

M：「それはどういう時に話すんですか？」

F：「昔はよく停電するようよ。」

M：「バリ島とかで停電するようよ。」

F：「そうそう。真っ暗になつた時に話してくれました。」

ああ、あと光太夫も、そういう感じで話してくれたね。」

M：「それは教えます、という感じですか？ それとも、

子供たちに話したくてという感じ？

明治というものがバックボーンとしてありながら、

それプラス大正時代の自由主義を体験している、い

い時代というか環境的には、恵まれた人だつたとい

う気がします。いい意味でも悪い意味でも、明治の

人なんです。」

第一には、言葉に対する僕とか、親に対する礼儀

に煩いこと。

第一は、そしてこれは皆がそうだったから、悪い

というものではないでしようけれども、親父が偉く長男がその次に偉いという家父長制度です。

第三は、明治の学者であること。明治時代はほとんどの学者が西洋の学問・文化を研究して日本に伝え、教えた啓蒙者であり、(自分の学問を究める)

学者というよりも教師だった。親父は一高や清泉で教師として生きがいを感じて、それが楽しみでもあつたのではないかでしょうか。広瀬真一さん(日本通運・元社長)なんて、その最たる例ですね。彼はガキ大将で中学時代に停学処分が何か受けているらしい。その彼が「亀井先生に相談したら、『お前は

札付きものだから、よその学校では受けてもダメだ、

一高だったらどんな悪童だつて点数だけで入学を決めるから、一高を受験しなさい」と言われた。そして、発奮して「一高に合格した」(『財界』一九八二年五月二十五日号 p.131からの引用)つて。「亀井

先生には、中学・高校・大学にわたつて真底お世話をなつた」(前掲書)。つて、こういう弟子がいるわけです。

F..個性をよく見てやつたんでしょうね。

M..他の大人とは違う視点で人のいいところ、個性をみてらしたんでしょうか。

F..個性をよく見てやつたんでしょうね。

M..植木屋さんが木を見て将来を想像するように、何か伸びる芽を感じるとか。

F..そう、植木屋でいう、この芽を切る、枝を伸ばす、

### 北脇(北脇井沢)での思い出

M..北脇へはよくいらしていたんですけど。

じやないかと思う。教育者の喜びってそういうことなんじやないかと思う。

M..家はどうでした? 入る学校を個性で分けていました。

らしたそうですが、それ以外のこと。

F..娘には煩がつたけれど、その他のことは比較的自由でしたね。ただ、商人の子(町っ子)と遊ぶのは

禁じられて、当時子供の間で流行っていたメンコやベーゴマは駄目、紙芝居も見てはいけなかつた。

小学生文庫、偉人伝といった類の本が多く、流行っていた『のらくろ』、『冒険ダン吉』、『タンクタンクロード』や『蜻の八ちゃん』といった漫画は読ませてもらえなかつた。冒険物語の沢山載つてある月刊誌『少年俱乐部』は買って貰えないから、学校で皆の話に入つていけず、だいぶつまらない思いをしましたよ(笑)。

M..大きくなつてからは、どうですか。

F..僕はね、合計2回、留年したことがあるんです。

中学校を五年(注:旧制中学は「四修」=四年間だけ)で学業を終わらせてよかつた)。それと戦争が

終わつたとき僕は、旧制ですから今でいう大学の一年生でしたが、戦争中はろくに勉強もできなかつたから、「もう一年やりたい」と言つて、一年留年し

たの。それでも親父は何も言わなかつたですね。何を勉強するつもりかとか、何のためにとか、そういう

ことはいつぶんも言わなかつた。「あ、そうか、わかつた。やつたらいい」と、それだけ。あれはどうしてだろう…。

M..戦時中のことで少し伺いたいことがあります。

西洋の文化を学んだ人からしたら、歐米と戦争しているというのは、ものすごい事件だつたんじゃないかと勝手に想像するのですが、もちろん、学校内

でました。家族だけでなく、親しい人や教え子(公文試験受験勉強者)を呼んで一緒に生活したんですね。

M..ご飯の準備は家族が?

F..けつこう親父はマメで、ご飯なんかは炊いていま

したね。浅間山の噴火の溶岩の塊を積んで、薪をくべて、ご飯を炊くのがおじいちゃん(高孝)の仕事みたいなものでしたね。朝早く起きて散歩がてら地元の開拓団の農家に行つて、キュウリやトマトなど自分でもらい、「これだけもらつてくよ」と言ってお金払う。朝ごはんはその野菜で、サラダなんて上等なものではなくて、食卓を飾つたりしてね。そういうことも楽しみだつたようです。

僕が小学校の頃、親父と一人で山歩きをしたこと

もありました。親父は学生時代にはよく山に行つて

いたようで、鷹巣山から鳩の湯、鹿沢温泉などに一緒に行きましたね。僕が友達と山に行く時は、必ず鎧節と梅干を持たせてくれて、地図の見方なども教わつた。親父が大佛次郎さんと東大寺のお水取りに行つて手首の骨を折つたその年には、僕と裕はバケツを持って片道二十分钟位の山道を鉱泉を運んで、それを浴槽を浸してマッサージをするのが毎日の役目だつたですね。数少ない親孝行の思い出です。

M..戦時中のことで少し伺いたいことがあります。

西洋の文化を学んだ人からしたら、歐米と戦争しているというのは、ものすごい事件だつたんじゃないかと勝手に想像するのですが、もちろん、学校内

で大きく思想が揺らいだということは、感じられない。

F：変わらなかつたですね。うちには『共産党宣言』みたいな共産党の本が随分ありましたよ。あんなの戦争中だつたら見つかつたら大変ですけれどね。

M：ええ。

F：それからレーニンの本とか。ドイツ語ですけれど、ありましたね。僕も高等学校に入つて、読みました

よ。戦争中だけど。

M：それは内に秘めてらしたんですね。

F：そうですね。学生の中で、左翼ではないけれど、

そういうことを勉強する人たちを睨まれないよう

にと親父が守つてあげたというのは、随分あります

よ。木村健康さん（のち東大経済学部教授）とかや

れなんとかとか。

M：なるほど…。公平な視点を持つていたんですね。

F：教師に生きがいを感じ、教えることは楽しみでも

あつたように思いますね。生徒というのは割合敏感

ですから、自分たちのことを可愛がつて教えてくれ

ているんだということがわかるでしよう。相乗作用

で、親父がそつだと弟子も返してくれる。そういう

のが非常にありましたね。それがどういう形で出て

きたかというと、卒業した人たちの同窓会というの

がある。一高の卒業生は全国にいて、親父は退官し

たのち、同窓会があるたびに呼んでもらえてね。ハ

ッピードラムと思つけれど、僕ら子供たちからする

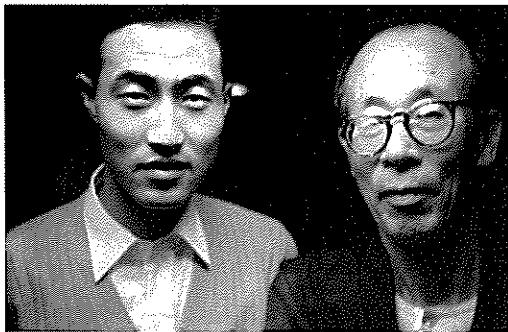
と、甘えすぎだと思うところもありましたね。自民

党の奈良県の代議士になつた奥野誠亮という人も

卒業生で、光太夫の扇子を持つつていて、くださつた。

そんなこともありましたね。

M：家にずいぶん学生さんたちが集まつていらしたみたいですね。



昭和30年(1955)年10月25日 鎌倉にて  
亀井泓(27歳・左) 亀井高孝(69歳・右)

亀井 泓(かめい・ふかし)  
1927(昭和2)年10月29日生まれ  
1949(昭和24)年3月 学習院高等科卒業(旧制)  
1952(昭和27)年3月 東京大学経済学部経済学科卒業  
1952(昭和27)年4月 日本銀行入行

## 祖父の思い出

小野あき子(亀井高孝の孫)

私は生まれすぐ父が戦死したので、祖父・亀井高孝は父親代わりとなつてくれ、嫁に行く途、一緒に暮らしました。

私は生れてはとても大きな存在で、困つたらおじいちゃんのところへ飛んでいけば大丈夫と思つていました。祖父にとつては自分の子とは異なり余裕があつたのでしょう。

半分おもちやのようく扱い、夏過ぎした北軽井沢で、まだ歩けない私を背負いかごに入れ、村を散歩していだたうです。面白がつてジャンプしたので母はヒヤヒヤしたと言つていました。

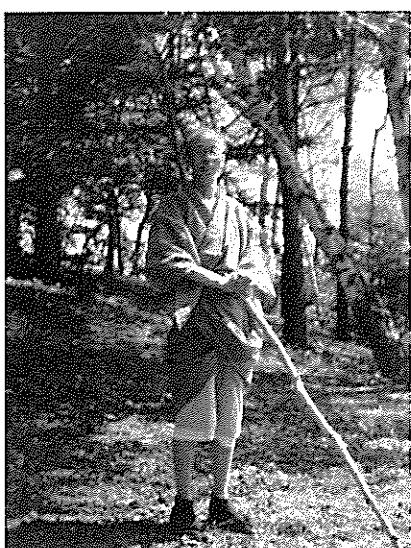
基本的にはとてもせつかりでした。散歩は毎日欠かさず行うのですが、いでたちは着物の裾を帶に挟み、ステテコを半分見せ(多分早足で歩くために)、ステッキは持つのですが、つくるではなく、ひきざるのです。

大股でスタスマ速いこと。たまに「おい、あき子散歩に行こう」と声がかかるのですが、速さにとてもついて行かれません。だんだん距離は広がります。そうすると道の「かど」で立つてこっちを見つめています。次の方で又ニコニコ立つていて、早足競争みたいでしたし、会話する暇もありませんでした。

家の中で「オーライ」と呼ばれ、すぐ飛んでいかないと機嫌が悪い、「筆を持ってきてくれ」と筆だけを持つていくと「気がつかない奴だな」。筆、硯、すみ、水さしのセットで持つて来いということなのです。すみを握っている様子を見て、手紙を書く巻き紙なのか、祝い袋用なのか、判断して持つていくのです。

ところが書斎に入ると静かな空気が流れ、何時間も机に向かっていました。時には机いっぱいの大きさの洋書を広げ、すごい近眼だったて天眼鏡を手にかがみ込むように読んでいました。英語はもちろん、フランス語、ドイツ語の本もありました。私の役目である「お食事ですよー」と声をかけるとすぐ机から離れ、「今日の『二飯は何かねー』と嬉しそうでした。

食べることは大好き。特に肉はうるさい。母が体を気遣い野菜中心になると「体から脂が抜けて干物になる」と言い、自分で駅まで買い物に行き「これを焼いてくれ」と差し出す。自分の生地近くの伊賀上野「金谷」さんから取り寄せ、家族だけでなく教え子さんた



着物の裾を帯に挟んだステテコ姿の祖父・高孝

ちを呼んで、賑やかに食べていました。お酒は自分は頂かないのに、用意するよう頼まれました。焼き芋が売りに来ると「おい！あき子、食べたいだろー！食べたいだろー！」と、あまり食べたくないでも「うん！欲しい」というまで聞く。本当は自分が食べたいのに「うん」と「じやー、行つてくるか」とゲタの音を立てながら出かけ、お芋を着物の懷に入れ帰つてくる。「さあ食べよう、さあ食べよう」と眼鏡を曇らせながら美味しそうに食べていました。

季節の食べ物は心待ちにしていました。春はタケノコ、近くの瑞泉寺から届けられるのですが、2回、3回と食べたい。母に「おい幸子！瑞泉寺に頼んでもらつてこい！」「そんなの嫌よ」と母。たまたま清泉の教

え子カイロクラブの一人が家を訪ねていました。「あら！家のタケノコも美味しいのお持ちします」こんな調子です。

晩年は光太夫にどっぷり浸かった生活でした。若い時に古本屋でふと手にした『北槎聞略』から大黒屋光太夫にのめり込み、ひたすら研究しておりました。

私に「一介の船乗りが字も読め、趣味も多彩、教養もある。面白い人物だ。ロシアの文化も日本に沢山持ち帰つたし」また数奇な運命にも興味が湧いたのでしよう、時間がたっぷりとれる教師生活が終わってからまとめ吉川弘文館、岩波新書から「大黒屋光太夫」関係の本が出版されました。新聞、ラジオ、テレビで取り上げくださいました。ヤマハホールでは「ソフィアの歌」コンサートもありました。八十近くになつて

いましたが、生き生きと毎日が嬉しそうでした。そんな折、一高の教え子である下田武三さんがロシア大使に任命されると、この機を逃してはいけないとロシア

ろう！食べたいだろー！」と、あまり食べたくないでも「うん！欲しい」と「じやー、行つてくるか」とゲタの音を立てながら出かけ、お芋を着物の懷に入れ帰つてくる。「さあ食べよう、さあ食べよう」と眼鏡を曇らせながら美味しそうに食べていました。

横浜港には大佛次郎（作家）、小山富士夫（陶芸家）さん何人のお弟子さんが送つてくださるという物々しいものでした。後日私に「シベリア鉄道は寝ても覚めても同じ景色なんだ」と言つていました。まだ共産主義が濃い時代だったので旅はかなりきついものだつたと思いますが、それに対する不満は全くありませんでした。

あちらで光太夫を研究している方にお会いしたり、収穫は大だつたのでしょう、私には大きな「琥珀」のネックレスをお土産にくれました。「まずはわしがつけられた」と暑い時期に帰つてきたので上半身裸、下はステテコでネックレスを自慢そうにかけていました。今でも私の宝物です。いつも光太夫の事が頭から離れないたのでしよう、私の娘が生まれ、杏の産地の長野に住んでおりましたので、杏子とつけようと思いました。市役所に出しに行くと受け付けてくれませんでした。

当時、名前にはかなりの制約があつたのです。困り果て主人と共に祖父に相談すると「光子」ということで答えた。光太夫から鎖国という言葉に思いを馳せ、「もし鎖国がなかつたら日本はどうなつていたのだろう」とその答えは聞かなかつたのが残念。「歴史を深く研究する

未来が見えてくる」とも言つてました。昭和四十年代でしたが、今は「出稼ぎ」で充分労働力は満たされるが、いずれ足りなくなり、外国から手を借りねばならないと、実際現在聞いたこともない言葉の外国人が働いている時代です。

九十歳近くになり、前日直してもらったガス湯沸かし器が爆発して火事になり、離れに住んでいた祖父の家が焼けてなくなりました。母が駆け付けた時には、祖父の寝ていた近くまで火が来ていました。祖父はベッドの上に正座し、覚悟した様子だったようです。幸い担ぎ出され、お弟子さんのいらっしゃる国立第一病院（現在の国立医療センター）に入院しました。その時もカイロクラブの方々がチームを組み、毎日火事のあと片付けに来てくださいました。

ある日、車で来て路上駐車をしようとすると、お巡りさんが「あー、亀井先生のお宅に行くのですね。大変でしたね。一回りして僕がいなくなつてから停めてください」と言いました。香氣な時代でした。一中、一高の卒業生も心配してくださいり、お見舞いとしてお

布団、食器、食べ物、はたまたトイレットペーパー（その当時オイルショックで不足していたのです）を送ってくださいました。ご近所の方には火事と聞いて大事なものをだいぶ外に出してくださいり、何と皆様のお力を借りりしたのでしょう。

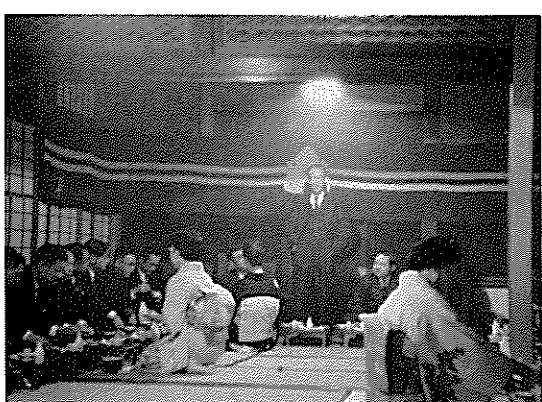
私は病院に会いに行き、言葉もないで「おじいちゃん」と声をかけると「よー、来たな。すべて燃えてしまつただろう」と、本心は解らないのだけれど、ケロリとしているのです。「でも悪いことばかりではな

いんだよ。教え子たちが次から次へと会いに来てくれる。こんなことにならないとたくさん的人に会えないよ！赤ん坊までおんぶして来てくれたよ！」実際の所、遠方から来てくださる方も多々でした。お陰で光太夫の関係もだいぶ残つていましたし、茶箱、桐の箱の中のものは無事でした。

クヨクヨしないのは気性なのでしょうか。よく横須賀線の中で、スリに遭い、お財布ごと盗まれるのです。「又、なんだ、あいつら、うまいネー。悔しいから今度、人のを盗んでみようと思うけど出来ない。厄落とし、厄落とし」とやはりケロリとしているのです。

祖父の口癖は「無教育な奴だ」でした。これは東大を出た人でも、自分の欲ばかり出る人、理不尽な人、ごまかす人は無教育な奴なのです。まあ祖父が生きいたら、この間（山口で）二歳の子供を助けた尾畠さんは教養ある、教育者なのです。

このように思い出しながら書いておりますと、祖父の声、しゃべり方を思い出し、楽しいような、そしてメランコリーにもなつてしまします。この企画をしてくださった鈴鹿市の方々、代田さんに感謝いたします。そしてみなさんに光太夫を心から愛し研究し続けた亀井高孝の名を心の片隅にでも止めてくだされば幸いで



同窓会で教え子たちに囲まれ挨拶する亀井高孝

徒10人程がお小遣いを集め、新式（太い棒状の蚊取り線香のようなものに火をつけ、金属の箱に入れ体を温める）のをプレゼントしてくれたのです。祖父は大変喜び、そのグループをカイロクラブと名付け、何かと遊んでおりました。彼女たちは、呼び方が「先生」から「おじいちゃんやま」へと変わり、よく家に出入りしていました。

それと同じようなのが一中の一刻会。一中で初めて教師をした会の名前です。その当時の教頭のあだ名は「ギヤボ」。名前の由来は確かではありません。祖父とはウマが合わなかつたようです。なにかで頭にきた祖父は下校時間前に帰ろうとしました。そうしたらギヤボさんに見つかり「亀井くん、戻りなさい」と。その現場を生徒さんが発見。生徒さんたちもギヤボさんに反発していたので急接近。その挙句、ギヤボ新聞と名付け不満を書いていたそうです。その中には陶芸家の

#### 追記 カイロクラブ（清泉女学院高等学校3期の仲間）

祖父はとても寒がりでしたので、冬近くからアルコールを使って温めるカイロを使つていきました。それを授業中に落としてしまいました。気づき面白がつた生

小山富士夫さん、東大病院の名医、銀座の老舗「さえぐさ」の御曹司、その他立派になられた方々がいました。

我が家にもよく集まつてらつしゃいました。祖父から皆さんがご出世された話は聞いていたのですが、どうも私には信じがたい、まるで学生さんのようなあけっぴらげな雰囲気で、祖父も若返り、なりたての教師と言つた風でした。その方々から聞いたのですが、「おじいちゃんのあだ名を知つてるかい? 天文台というんだ」。事前に家で作った授業用ノートを決して見ず、目をつぶり、天井を見ている風。ノートを思い出しながら喋つていてるのでしよう。

天文台というあだ名は一中、一高で一貫していたようです。

#### 井上靖さんと祖父

上の子がまだ二歳にならない頃でまだ下の子がいませんでしたから、昭和四十六年の初め頃でしょうか、井上靖さんが鎌倉の家にお見えになつたことがあります。私は丁度、里帰りしている時でした。東京からのお客様は、今より横須賀線の本数が少なかつたので、だいたいの方はお昼過ぎにお見えになりました。

祖父は昼食後、昼寝をする習慣でした。私はお客様をお座敷にお通しし、お茶をお出しして奥に引っ込み、そのあと、母と一緒に祖父を起こし、身支度を手伝うのです。井上さんの時もそうでした。

祖父をお座敷にと、ふすまを開けると、なんと息子がちょこんと井上さんの真向かいに正座しているのです。井上さんも話しかけるでもなく、静かに座つてら

つしやいました。その上なんと息子は、井上さんにお出ししたお菓子を食べています。慌てて連れ戻しましたが…。

井上さんと祖父がどんな話をしていたのかは、聞かずじまいでした。祖父は光太夫に魅せられ、何十年もたずさわった、地味な一研究者でした。井上さんは祖父の研究を基に小説家という立場で読者の心に光太夫を届けたのではないか。

不思議なことに、今年の夏、怪井沢で出かけたあるコンサートで、友人から井上さんのお嬢様ご夫妻を紹介されました。ほんの少しの間でしたが、光太夫の話を致しました。



昭和41年10月23日 あき子(左)と高孝(右)  
鎌倉の旧宅にて

## ダイコー

### 大黒屋光太夫 記念館だより 25号

三重県鈴鹿市神戸一丁目 18-18  
鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

Tel 059-382-9031 Fax 059-382-9071

<http://suzuka-bunka.jp/kodayu>

鈴鹿市若松中1丁目1-8  
大黒屋光太夫記念館

## ご利用案内

開館時間 10:00～16:00

休館日 月曜日（休日の場合は開館）・火曜日・第3水曜日  
年末年始（12月28日～1月4日）

入館料 無料

アクセス ☆近鉄名古屋線急行利用 伊勢若松駅下車 徒歩15分  
☆自家用車のナビで「大黒屋光太夫記念館」が検索されない場合、「若松小学校」を目的地にされると便利です。  
若松小学校の正門前が記念館です。

<http://suzuka-bunka.jp/kodayu/>

<http://www.city.suzuka.lg.jp/life/shisetsu/9209.html>

